

模型飛行機の世界

趣味か 道楽か?

点検整備部

第二電装客室整備課

安藤 由隆さん



ユニークな趣味というのは結構あるようですが、ここで紹介する安藤さんも大変ユニークなクオリティライフを歩んでいる一人のようです。

その趣味とは、模型飛行機を製作し、実際に飛ばしてしまうのです。ただ作って飛ばすだけでは、お父さんが子どもに作ってあげるオモチャのようですが、そんな軽い言葉では納まりようのないスケールの大きな物なのです。ラジオ・コントロールで飛ばすこの飛行機を目の前で見た時の驚きは言葉では表せません。そして、これらの飛行機の多くは、安藤さんが設計・作図そして製作したものばかりと聞いて、またまた驚いてしまいました。

福岡の、ある町の高台の家から、一人の少年が模型のグライダーを飛ばしました。このグライダーは、お父さんが作った物で、親の目をぬすんで持ち出したのです。そして、「これが模型飛行機を飛ばした一番最初……」と言う安藤さん、それ以来模型飛行機が、病み付き。になつてしまい、小学校6年の時には、ラジオコンの設計から操縦まで、という専門書を取り寄せて勉強したそうです。当時は、大人用の専門誌だったので理解するのが大変だったそうですが、中学1年の時にオリジナルのラジオ・コントロール機を初めて製作したそうです。そしてその飛行機が、大変良く飛んでくれて、ますますこの趣味を自分の一生の物にしようと思つたそうです。それから20年が過ぎ現在に至っているのですが、ただ過ぎただけではありません。この技術を生かして、読売系TV番組の「鳥人間コンテスト」にも参加しました。当時羽田整備工場の多くの製作仲間と作った、WE・ARE・ONE IIは琵琶湖の10mの高台から飛び出し、一三〇mを越えました。その時、製作リーダーだった安藤さんは、「みんなが努力した結果で、私の力ではありませんよ……」と、実に謙虚な発言なのです。

そして、こればかりではありません。以前に「おぞら」に掲載していた紙ヒコーキにも一役買い、現在も紙

ヒコーキの講師として営業の手伝いをすることもあります。また、社内のみならず社外においてもその活動は広範囲なもので、昨年は、模型飛行機のモデラーが集まつて開催される模型航空ショーにおいて、4機編隊のブルー・エンジェルスを飛ばし、2万人近い観衆をわかせるした。こうなると模型飛行機が趣味というより、模型活動が趣味といった方が当たっているかもしれません。そして、それを物語っている極めつけが、模型専門雑誌「ラジオコン技術」への執筆で、今までに書いた製作記事も数えきれないほどだそうです。きっとみなさんの中で読んだ方がいるかもしれませんね。その記事というのも設計・製作文・イラストそして図面までと、一人で全部プロデュースする内容で私などが見たら大変なことだと思つたのですが、本人いわく「好きな事だから、そう大変ではありません。それよりもむしろ思返しですよ。昔から多くの諸先輩の模型記事を読んで知識を得ることができました。今度はそれを次世代の同胞に伝えて行きたい。ただそれだけです」とまたまた謙虚な発言なのです。こんな安藤さんだから職場でも大変に有名なのではと思うのですが、意外にもこんな趣味を持つているのを知らない人がほとんどです。それもそのはず、職場の中では自分から進んでこの趣味の話をするには決してないそうです。そんな安藤さんは、「私のやっているのは趣味ではなく、道楽だと思つています。だから自分からやると言う人には協力を惜しみませんが、自分からは勧めません。なにせ道楽ですから……」と言いきります。この言葉に人柄を見たような気がするのですが、さういえば、職場での明るい笑顔は、こんなことが活力になっているのかもしれない。

今、安藤さんは、この趣味を生かして新しい計画を立てています。今年入ってくるB七四七―四〇〇の120のフライング・モデルを11月3日の模型航空ショーで飛ばそうとしています。こんな楽しい夢を実現してくれる安藤さんの活動は、決して道楽だとは思っていません。むしろすばらしいクオリティライフと言えるのではないのでしょうか?

(インタビューアー 橋爪恭子)